



【書評】本良信典著『山寺からお坊さんのツイッター』
寺だより〜その3〜 文芸社刊

A5判 三五三ページ

頒価記載なし

酒井 董美

ただよし

著者・本良信典ほんりょうしんすけは広島県出身で、神奈川県海老名市にある日蓮宗妙常寺の院首。現在82歳である。

本良師は、住職に就任してから先代に倣い『寺報』を原則として毎月一回発行してきた。第1号は昭和60年7月16日である。本書は平成元年9月11日第74号から同6年2月23日第125号までをまとめたもので52編から成っている。ちなみに本書と同じタイトルで、本書に収められた以前の『寺報』は、「その1」、「その2」として刊行されているから、本号以降も「その4……」と続刊されることであろう。

ちなみに「その1」は「頒価五〇〇円」、「その2」は「定価一、四〇〇円＋税」と表紙に印字されているが、「その3」である本書には、どこを見ても価格は印刷されていない。希望者には無料で提供するという意味かも知れない不思議な作りになっている。

さて、「その3」である本書の内容は、書名からも分かるように、『寺報』に掲載されている著者のおりおりに思ったことをまとめたものである。

一読して感じるのは、内容は種々雑多であり、宇宙のことから日常の細かなことまで取り上げられている。著者は平成元年8月、アジアを旅行した。パキスタンから中国に入り、検問所の対応の違いや、人々の暮らしぶりに触れたりしている。このようにシルクロードを旅して、孫悟空を連れた三蔵法師さんざうぼうし（諱は玄奘）の『西遊記』に夢を馳せたり、仏陀から日蓮聖人の教えを説いたりしているが、著者は、読者にお経の意味を理解してもらおうと、童話を引用したり、自身で童話を作ったりと、自在にヘンは動いている。

また国産品の物価高騰がエルニーニョ現象に関わり、それは地球温暖化現象と無縁でないなどから、人間はいかなる存在であるかを、読者に考えさせてくれる。ともかく本書は気の向くままに書き綴られたエッセイであり表現はやさしく、読んで決して肩は凝らないが、実際は知性にあふれ、なるほどと仏教の真髄を垣間見せてくれている。

院主といえは、寺院のトップである。そのような著者が、庶民の立ち位置まで降りて、具体的な事例を示しながら述べている本書に、読者はいつしか引きつけられ、最後まで読み通せられてしまう本である。続刊への期待もいつそう高まってくるであろう。

（元島根大学法文学部教授）